

## 7 高位頸髄損傷者の主介護者がはじめて排便介助方法を獲得していく中で抱く気持ちの変化と看護師のかかわり

病院看護部 4階病棟 白井まゆみ 浅野美子

研究目的：排便介助方法獲得過程における主介護者の気持ちを明らかにし、気持ちの変化を起こした看護師のかかわりを明らかにする。

研究方法：当院4階病棟入院中の高位頸髄損傷者の主介護者2名を対象に、排便介助場面でのかかわりをデータとし、半構成的なインタビューをおこなった。

倫理的配慮：面接・調査への参加協力依頼書により、本研究の目的、参加協力の自由意志とプライバシー保護、および個人情報保護について説明し、同意を得た。

### 経過

ケース1：40代前半男性・SCI/C4。主介護者は妻。本人・妻・小学生2人の4人家族。当院より1病院経由し、自宅へ戻る。

初回排便介助体験前の主介護者は、「嫌だな〜」「やりたくない」「家に人を入れたくない」と話した。しかし、ベッド上ビニール排便の指導や、他者との情報交換をおこなうこと、夫からの依頼の言葉などによって、「夫の介護をやらなくちゃ」と変化した。そして、排便介助を繰り返すことで、「自分にもできるかも」と話した。さらに家族と話すことをすすめ、他者の介護体験を伝えることによって、「排便については大丈夫です」と変化した。

ケース2：60代前半男性・SCI/C4。主介護者は妻。本人・妻・成人した子供2人の4人家族長女のみ同居している。当院より直接自宅へ戻る。

初回排便介助体験前の主介護者は、前医での排便介助のイメージから、「自信がない」「排便に対して抵抗がある」「一人ではとつても無理」と話した。しかし、排便介助体験を重ねることや、娘と話すこと（排便介助体験や今後の不安）、さらに他者の介護体験の話を看護師が伝えると、「気持ちが楽になった」「やればできる」「娘もいるんだ」「排便のイメージが変わった」と話した。

退院時には、排便介助体験を繰り返すことや夫からの感謝の言葉により、「何度もやったので大丈夫でしょう」「何とかやっているといます」と変化した。

### 考察

経過より主介護者は、便のマイナスイメージ・排便介助や在宅での介護を一人でできるのか（手技/家族員/支援）・在宅での不安と排便介助以外の不安という気持ちを抱いていた。便のマイナスイメージや手技に対する不安には、排便介助体験を繰り返すことで手技と排便コントロールが可能であるという知識を獲得し、気持ちに変化した。在宅での不安については、社会資源の活用方法と在宅介護経験者の体験談を伝えること、さらに家族間での会話をすすめ、一人きりでおこなう必要はないと説明し気持ちに変化した。排便介助以外の不安については、指導と体験により知識と技術を獲得し気持ちに変化した。

高位頸髄損傷者・主介護者・家族それぞれの気持ちに対する理解を得、家族のサポート力を引き出せるようかかわることが重要であると考えられる。